

文化高知

2003年11月 NO.116



「Skate girl」 大平裕之

〈もくじ〉

開き直り文化	下岡正文	2
かっこう悪くたっていいじゃない	山田和也	3
高知の現代美術・2003年の状況	松本教仁	4～5
子どもに本を手渡す充実感	和田智香	6～7
日々コロコロを耕しながら	小西 豊	8～9
ゴスペル～ブライトン・マス・クワイヤー高知のご紹介	大川わき	10～11
フランスコミック バンド・デシネの魅力	奥田奈々美	12
かるぼーと 8月～10月の事業のご報告		13
風俗歳時記・風伯		14～15

(財) 高知市文化振興事業団

開き直り文化

下岡正文

高知へ移り住んで間もなく、酒を覚えたところである。夜、仕事を終え職場の近くの居酒屋のれんをそとくぐると、常連さんとおぼしき人たちがコップ酒をおおっている。

その中の中年男二人が、なにやらやり合っている。

その居酒屋は六、七人止まり木へ座ればもう満員になるような店である。二人のやりとりはいやでも耳に入ってくる。

何を話しているのかと思うと、いい年をしたオンチヤンが、コップは丸いか、四角いか、ということをよくそまじめにやっているのだ。何もそんな話題を……と思いつつ、聞くともなく聞いていると、なるほど、と思った。

「コップを真上から見ると円形じゃないか」

「けんど横から見ると長方形ぜよ」

一つの物体も見方によってはまた別の形がある。二人はそのことを言っているのだ。

なるほど、とうなった。同時に、そういう「理屈」をさかんに酒を飲んでいのがまた、すごいと思った。この二人に限らず、周辺を見回しても、相手の言うことに、簡単に「そうですね」と言わない人が結構多い。「けんど……」とくる。ここが大事なのだ。コップが丸かろうが四角だろうがどうでもいいことではないか、とはならない。

あいつちを打つ前に、そうかよ？と考える。別の言い方をすれば思考の方法が一面的でない。多面的、多角的だ。だから奇想天外な発想も飛び出したりする。一筋縄でいかないのが高知らしいといえるのではないか。

在野精神、批判精神旺盛。よく、

土佐人を評して、こういう。そうした土佐人の精神的な背骨の形成は自然や風土と無縁ではなからう。四国山地。この存在は大きい。かつて、この国の中心点だった上方。周りの地域はそこへ照準を合わせる。そして策を練った。少しでも権益に預かろう、少しでも権益地に近づこうと。

だが、四国山地の壁は高く、厚い。壁の南側は、少々知恵を働かせ、工



夫を凝らしても容易に権益地には近づけない。

それならと、くると後ろ向きになり壁を背にした。目の前は太平洋。果てしなく広がる空間。どうだ、と開き直った。

四国の他三県や中国地方などと高知はここが分岐点になった。

高知以外の周辺地域は知恵を絞れば絞るほど、権益に近づける。けれど、どうしても一定の枠を外すわけにはいかない。枠から一歩でもはみ出すと破たんを生ずるからだ。どうしても既成の中での発想となる。

一方、開き直った側。これは強い。駄目でもともと、矢でも鉄砲でも持つてこい、怖いもの知らずである。枠がないのだから既成の概念にとらわれることはない。自由で大胆。

自由民権運動も龍馬脱藩も何もかも、既成の概念に縛られないところから出てきたのではない。多面的なものの見方、それらが個性的な思想家や言論人、政治家……多数の人材を輩出したのではないか。

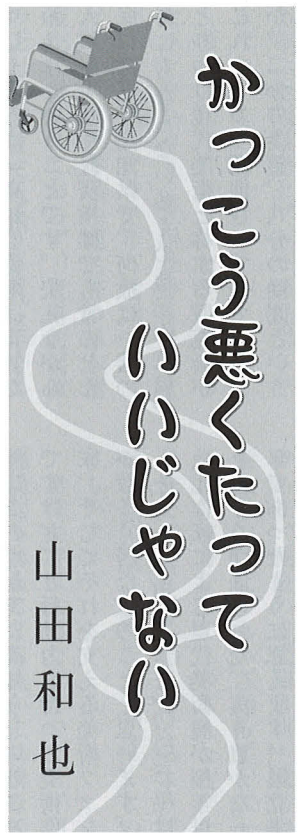
時代は動き、今、漫画が水面に顔を出している。自由民権も漫画もその水脈は一つなのである。ユーモアやギャグ、風刺……自由で大胆で個性的。漫画王国は偶然ではなく必然の中から生まれてきたと思えてくる。コップ論争も漫画も高知の文化の象徴でもある。

——というようなことを勝手に考えてみた。

(しもおかまさふみ／横山隆一記)
(念まんが館館長)

かっけい悪くたって いらじやない

山田和也



十月二十六日、高知市文化プラザ大ホールにて「障害者イズム」このままじゃ終われない」という記録映画を上映させていただきました。

この映画は今年三月に完成しましたが、「障害者イズム」というタイトルについてよく質問を受けます。なぜそんな強面のタイトルにしたのか、映画のイメージにはマイナス効果なのではないかというのですが、もちろん「障害者」という言葉を使うことに対し、はじめのうちにはかなりのためらいがありました。けれども、六年間にわたる取材のなかで、彼らのおかれている世界がどれだけ世間一般から隔離され、無視されているのかを知った時、あえて「障害者」と呼ぶことにしたのです。

きっかけは一九九五年一月、阪神大震災直後の神戸、瓦礫の山の中を車椅子に乗って精神的に走り回る障害者のグループに出会ったことでした。彼らは被災した障害者仲間の安

否を気づかって、神戸に来ていたのです。

「ひとり暮らしだから、部屋の中で車椅子から落ちたり、コンロの火で火傷をしても誰も助けに来てくれない。そのままじっとしているほかないんですよ」

まず車椅子に乗った障害者が「ひとり暮らし」をするということに驚きました。さらに、どうしてそんな危険を冒してまでひとり暮らしが必要があるのだろうか？ そんな疑問からこのドキュメンタリーは出発しました。

マスメディアに登場する障害者は、ほとんどの場合「特別な人」です。パラリンピックの選手、障害に悩まされながらも偉業を成し遂げる人、花形職業から一転して車椅子生活を余儀なくされた人……。私たちの隣にいる「普通の」障害者たちに関する関心はほとんどないと聞いても過言ではないはずです。

翌年、障害者団体から話を聞くことから取材が始まりました。障害者がひとり暮らしをすることを「自立生活」と呼んでいることも知りました。しかし、どうしても分からないことがありました。危険を顧みずにひとり暮らしをすることにどんな意味があるのだろうかということでした。しかし、普通の人間であれば、成人すれば「自立する」のは当たり前なことではないでしょうか。自由のない施設を出てひとり暮らしをしたいという想いもごく当たり前のこと。それすらも「夢物語」になってしまふのが彼らの現状なのです。

いざ自立を実行に移したときの、社会や肉親の抵抗。日常的な障害者への差別（就職、労働条件、恋愛、住宅、飲食店への出入り）に対する怒りと失望。自分たちの存在すらも気にしてもらえない悪意のない「無視」。そして不自然な体勢を強いられることから脊椎が傷ついてしまう「二次障害」という時限爆弾。平均寿命五十歳という俗説。迫りくる人生のデッドラインを見据えながら、彼らは「自立」という「当たり前」の夢に向かって走り続けています。普通だからこそ普通の人生を送りたい。それが夢でなくなるときまで彼らは「このままじゃ終われない」の

です。それから六年間、無我夢中でカメラを回し続けました。迫りくる期限に追い立てられるように、必死に社会に出ていこうとする彼らを見ていくうちに、彼らの住む世界と一般の社会の間に大きなギャップがあるのだということは何度も痛感させられました。彼らが障害者であること、そのことをまずしっかりと社会に認識してもらわなければならない。そんな願いをこの「障害者イズム」というタイトルに込めました。

この映画を観てくれた若い障害者がこういう感想を書いてくれました。

「何が出来ないかを考えるのではなく、何が出来るかを考えよう。かっけい悪くたっていいじゃない」

そして、障害者を持っていない人がこう書いてくれました。

「当たり前前日常」さえも拒んでしまうこちら側こそ「障害者」ではないかと思われた気がします」

この映画を通して、テレビメディアでは決して取りあげられないことのない地道な人生が、どれだけ困難で、誇り高く、感動的であるか、そのことを世の中の全ての人々に向けて伝えていきたいと思っております。

(やまだかずや／「障害者イズム」このままじゃ終われない」監督)

高知の現代美術・2003年の状況

「Future Kiss」展と「OVER DRIVE EXHIBITION」展とサブカルチャー エキシビジョン」展
松本教仁

仕事柄、他県の美術館の学芸員や美術作家の方々と話をする機会が多いのですが、皆さん口をそろえておっしゃるのは「高知の美術は元気がねえ」ということです。失礼ながら人口も少なく経済指標でも常にどん底にあえぐ高知県で、何故に一銭の得にもならない多くの地元作家展、とりわけ現代美術と称する展覧会がこれまで多く開催されて来ているのか、二分の羨望、八分の疑問とい

感じで質問されてしまいます。これについては、別に難しく高知な理由があるわけではないと思うのです。先に結論を言ってしまうようですが、「作品を創りたい」とか「展覧会をやりたい」といったシンプルな情熱と行動力さえあれば何とかなってしまふものなのだと思います。不思議なもので、自分でもどうにも押さえることが出来ないヤル気というものは、予算が無いとか忙しくてヒマが無いとか障害となる決まり事が多すぎるとか役所が協力してくれないとか等々、普通に考えればこれはムリだなという世の常識、厚い現実の壁をグイッとねじ曲げ突き破るといった、ミラクルを呼び起こしてしまうものなのです。

少々大袈裟な言い方になってしまいましたが、つまり高知で現代美術展というものがその時々表情を変えながらも綿々と続いてきたことは、それだけ後先を考えないピュアな情熱（この点が実に高知らしいところですけど）と行動力を持った美術作家、そしてそれを支える美術ファンが数多く居た故のことと思います。そんな高知の本年二〇〇三年は、地元作家による現代美術展が例年以上に多く開催された、実り豊かな一年であったように思えます。県立美

術館では十名の女性作家による公開制作ワークショップ「5 ROOMS」が、かるぼーとでは岡山、香川からも多くの出品者を集めた「ジーンズ・ファクトリー・アワード2003」展や恒例企画の「フラクタル21」展、そして高知市文化振興事業団が主催した「OVER DRIVE EXHIBITION」展（以下「ODEX展」）および「Future Kiss」サブカルチャー エキシビジョン」展（以下「F-Kiss展」）などが開かれ、これら参加作家数の多さと出品作品のボリュームなど、従来の県内企画と比較しても確実にスケール・アップを果たしてきていると思います。

高知市文化振興事業団にはこれまでも「アート・エナジー展」や「ポリクロスアート展」、今は無き高知市民フロアでの数々の個展等々の美術展覧会をサポートしてきた歴史があり、かるぼーと開館後にはどのようなアクションを見せてくれるのか注目していたのですが、今回その歴史が継続されていることを目の当たりに出来て、ホッと安心したことでした。その高知市文化振興事業団プロジェクトのもと、美術作家たちがどのようなダイレクションを見せるのか



「Future kiss」展会場

ある「企画コンセプト」の脆弱さです。

会場入口で作家メッセージの入ったパンフレット（立派なつくりですが、作家名ルビや生年、活動プロフィール、図版作品の題名等の基本情報に掲載されておらず、資料的価値の乏しさがとても惜しまれます……）が無料で配布されていて、こちらに企画主旨が述べられています。要約すると、過去県立美術館が行った地元作家展（「NO BORDER展」）は作家らの目標の焦点が定まっておらず迫力に欠けグループ展に成り得ていないが、「ODEX展」はそういった学芸員によるキュレーションを排し、出品作家自らが「自由な感動に溢れる空間」をつくるのだ、といった力強いフレーズの数々が勇ましく躍っています。

そもそも県立美術館の「NO BORDER」展はグループ展ではないのですがそれは措くとして、まずはその意気やよし！ 頑張れ！ と思いました。ですが一方でこの論法はあまりに古い、古色蒼然としたイデオロギーだとも思いました。唐突に美術館という「公の権威」を設定し、その権威に対して市井の美術作家たちによる反発と対抗の姿勢を唱えているこの主旨はまさに「二元論」

であり、戦後の安保闘争期や前衛美術全盛の時代ならいざ知らず、二十世紀にもなつてこのような古びた論法を前面に打ち出してくるようでは、「現代」美術展の名が泣くというものです。無論批評は大事なことで、問題提起されることも大いに結構なのですが、それはそれで代わる新たな価値を作家として生み出せなければ、その反対姿勢は無責任と同義語になつてしまうと思うのです。主旨のなかでは、作家による「開かれたアート」の可能性を提示するようにも述べられていますが、では肝心の「開かれたアート」とは一体何なのかの具体的な説明は全くされていません（個々の出品作品で表明されておられるのかも知れませんが……）。極めて論拠が甘いのです。

誤解の無きよう申しますが、美術館企画へ反発の姿勢を表明されているからこのような要らぬ苦言を申すのでは全くありません。折角の好企画なのに、自分たちの立ち位置を浅薄な二元論の檻の中に作家自らが閉じこめてしまい、自分たちの器量を狭めていることの愚を指摘させていただいているのです。無理に言葉で企画を飾らず、作家ならば言いたいことは自分の作品でキチンと表現する、それを可能とする自己の表現能力を磨くことが、まずは肝要だと思います。

もう一方の企画「F-Kiss展」はイデオロギーの香りのない、とてもお洒落な和み系プログラムだったと思います。参加作家も伊藤キム+輝く未来といった超大物から超無名の自称アーティストの方々まで、プロ、アマのアーティストたちがこの企画内で混然とMIXされておられ、通常ではあり得ない全くクラクラするラインナップが実現しています。また、会場内のオープンカフェやグッズ販売も楽しく、展覧会という現状システムの次に来る形式を示唆していたようにも思えました。今日の日本美術の特徴を一言で言うなら「可愛いルックスをした狂気」、さらにもう一言付け加えると「デジ

タル風味の狂気」だと思うのですが、「F-Kiss展」で行われた数々のプログラムはそれらを体現しているように思います。

俗なるものの中にほんの一瞬聖なるものが見えてしまう、そんな至高の瞬間があります。それは見ようと思っても見えない、計算ずくでは絶対になどり着けない、ただ「あちら側」からやって来てくれるのをひたすら待つしかない瞬間。「F-Kiss展」すべてのプログラムを観たわけではないのですが、ひよっとしたらそんな凄惨な瞬間が「F-Kiss展」で発生していたかも知れません。全てにゴールを設定し綿密な計画の上になり立っている県立美術館の企画では持ち得ない、何が起こるか判らずドキドキしてしまう新鮮さに満ちた「F-Kiss展」の開催を、とても羨ましく思いました。

「F-Kiss展」出品者の中で、一番可能性を感じさせたのはマンガ家・村岡マサヒロさんです。今の村岡さんのポジティブな表現は今後広範囲にわたって強い影響を与えていくに違いないことを最後に力説いたします。まつもとのりひと／高知県立美術館主任学芸員

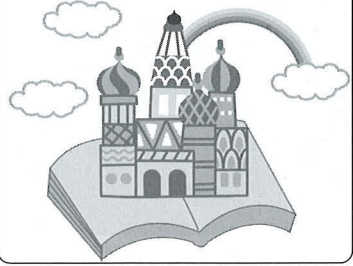


「OVER DRIVE EXHIBITION」展会場

子ども本を 手渡す充実感

—子ども主体の選書会より—

和田 智香



「おなかの中にあるものが分かる本を持ってきてくれてありがとうございます。友だちをたたかれんと思いました」

これは、私がライフワークとして取り組んでいる小学校での選書会で、ある男の子が書いてくれた感想です。「おなかの中にあるものが分かる本」とは「人体絵本」(ポプラ社刊)のことです。感想を書いてくれたのは、二年生の男の子。時々、友だちをたたいて先生から「おなかは大切なものがあるからたたかれん」と注意を受けていたようなのですが、改善されなかったそうです。確かに外から見ただけでは、中にどんな大切なものが入っているのかわかりにくいですよ。

私が行っている選書会では、体育館などの広いスペースに約五百冊の見本の本を展示し、一クラスずつ見に来てもらいます。読み聞かせや本

実際、本が図書室に開架されると、選ばれた本たちはあっという間に貸し出しされる、図書室に来る子どもたちが増えるなど、選書会は確実に子どもたちが本に親しむきっかけになっているようです。回を重ねるたびに、数々の心に残るエピソードとともに、ライフワークとして取り組んでいくにふさわしいものだと感じています。

「一冊の本との出会いをお手伝いしたい」「情報を発信できる店になりたい」という目標をかかげて、絵本の店コッコ・サンを開店したのは、一九九九年一月のことです。十七年余り続けていたサラリーマンからの転身でした。「二カ月でつぶれますよ」。絵本店を開きたいと思った時、業界の方にそろってこう言われまして。今振り返ると、全く畑違いの職種で、業界のことがよく分かっていなかったから踏み切れたと、つくづく思います。

最初は子育てで出会った絵本の良さを広めたいとの思いだけでした。退職金を全部費やして、念願の店を持ったものの、ほとんどお客が来ない日が続きました。当店の屋号は、私の大好きな片山健さんの「コッコさん」シリーズ(福音館書店)にち

なんだものです。シリーズの中の「コッコさんのおみせ」では、コッコさんのお店は閉古鳥が鳴いているのです。「パチパチパチ、お客はだれもきません」という文が、他人事ではなく、骨身にしみます。「やっぱり二カ月でつぶれるのかしら」と相当落ち込んでいました。

しかし、落ち込んでばかりいても仕方ありません。もともと繁盛しないと言われた店ですから、こういうときには開き直りが必要です。暇はあり余るほどあります。気分を変えて娘の通う小学校で、近所のお母さん方と読み聞かせをすることにしました。週一回、長休みに図書館で「好きな子、よつといで」というスタイルです。子どもたちは大喜びで私たちを受け入れてくれました。子どもたちと触れ合うことは、とても楽しく、元気をいっぱいもらいました。しかし、その反面、二十五年ぶりに踏み入れた学校図書館のつまらなさに愕然としました。「面白くない」「一言につききました」「学校図書館をなんとか面白くできないか」と悩んでいたときに、県外の本屋さんで行っている選書会の記事を読んだのです。「面白くない」と感じた理由がこの記事を見て少し分かった気がしました。

つまり、学校図書館では、選書がほとんど大人の目線でされているということ。もちろん、大人からきちんと手渡していきたい本もあるはずですが、実際に使う子どもたちの欲する本も同じくらい必要です。

「これだ!」と、ピンとききました。高知の子どもたちにも自分で本を選んでもらいたい、そうすれば学校図書館はきつと楽しくなるはず、との思いを募らせていました。

といっても学校と全く取引がありません。営業に行っても「既存の本屋さんがありますから」と言われて、門前払いです。しかし、どうしてもあきらめることができませんでした。かといって、いいアイデアも浮かびません。そんな時、一人の先生が店を訪ねてきてくれました。

冬の大雨の降った日曜日、全くお客様が来ない日でした。先生と長



い間話をしました。選書会の記事も見ていただき、「なんだか、面白そう」と言ってくれました。そして「結果は分からないけど、とにかくやってみよう」と言ってくれたのです。

こうして、初めての選書会を高知市の長浜小学校で行うことになりました。選書会では、子どもたちは活き活きとして本を選んでくれました。選べない子どもには一人一人本を紹介しました。お気に入りが見つかった時の表情は格別でした。三日間にわたり、毎日六時間、学校で子どもたちと過ごしました。手間のかかることには違いありませんが、本を手渡したという充実感で満たされたことを思い出します。

「こんなことをしているのは、利益率が悪くて店がつぶれますよ」と取次店(書籍の間屋)からは言われ、全く評価されなかった選書会ですが、口コミで広がり、昨年の一学期は二十を越える学校で実施できました。

選書会は当初、市民図書館の本を学校に貸し出してもらって、行っておりました。ところが、選書会を希望する学校が多くなり、借り換えはするものの、同じ本が長期にわたって貸し出し中ということになってし

まいました。やはりこれはおもしろくない状況です。そこで、意を決して出版社に協力をお願いしようとお願ひしようとして、夏休みが始まってすぐ、子どもたちが本を選んでいる写真を携えて上京しました。各出版社での評価はとて高く、大半の出版社が協力を申し出てくださいました。

さらに、生涯学習をすすめる上の

学社融合(学校教育と社会教育の融合)を理念にコミュニティづくりをしている千葉県習志野市秋津コミュニティーの岸裕司さんにもお会いしました。岸さんは私の活動を聞いて、「この活動は全国に知らせよう」とご自分の仕事で携わっている、学校図書のカタログ「NCLの会」の紙上で大きく取り上げて、春野町立東小学校の子どもたちが本を選んでる写真を大きく載せてくださいました。このカタログは全国で五万部も配布されたそうです。



出版社の評価は、「アイデア次第で地方からも発信することができるといって自信を私に与えてくれました。これから、コンピュータ化を含め、学校図書をめぐる環境は大きく変わっていくと予想されます。目の前には道は決して平坦ではないと思いますが、与えられた課題に丁寧に取り組んでいくことができたら取り組んでいくことができます。こんなうれしいことはありません。わだちか／えほんの店コッコ・サン店主

現在、私は、学校に行きたくても行けない「不登校」の中学生と毎日つきあっています。

先日仕事から夜遅く帰ってくるとある卒業した不登校の女の子から突然電話がかかってきました。私は正直言って疲れていましたが、直感的に話を聴かないといけないなと思いました。

彼女があることで悩んでいたのは、以前から知っていました。そのことを蒸し返すようにいろいろと話してくれるのです。

「フーン」なんて聴けません。「そうか、つらかったがやねえ」とか、「うーん、そのときしんどかったがや」とか、話の節々に出てくる彼女の言葉から気持ちをくんで彼女の気持ちを返していくのです。

「気持ち」を聴いたら 少しは道は開ける

私たちは、日々のやりとりでは言葉を聞いて言葉で返すことが多いです。言葉が続けば続くほど、その言いたい気持ちをくんで気持ちを返してやるのがない、今の子どもは相手に分かってもらったとは思わないのです。それで一時間ほど、先ほどの彼女の話を聴きました。この時間が時にはとても長く長い。

正月や盆の時だけということも珍しいことではなくなりました。

今、学校では地域のお年寄りの方々とふれあう学習（「総合的な学習」と呼ばれています）というところで、さまざまなプログラムをかまえて地域に子どもたちが出かけていくことをはじめています。

これは時期すでに遅しとも言えますが、今までの教育の中で忘れかけていたものにやると気づきはじめてからかもしれません。地域ぐるみの子育てということにやると「学校」も本気になってきたということかもしれません。自分の孫だけではなく、地域に住んでいる子どもたちがみんな自分の孫なんだという意識。考えてみれば昔はそれが当たり前でした。しかし、高度経済成長期の日本は、そういう大事なことを置き去りにしてしまっていた。そのツケは大きいんですよ。

「ただいま」「おかえり」 のメッセージ

近所のAさんは、私が自転車で帰っているとよく「先生、おかえりなさい」と声をかけてくださいます。私はハッとします。自分の子どもにはそういう声かけは当然しているけれども、私自身、地域のよその子に

ですが、私もずいぶんと気長になりました。以前はこんなに聴けませんでした。でも話を聴いてやると、手が吐き出した分、今度はこちらからの話も入っていくんですよ。

親子関係でもいつもこういうわけにはいきません。そんな親子がいたらすごい話ですが、これは他人だからこそできるという側面もあるわけです。でも、弱音を吐けるということ、そしてそれを聴いてもらえること、この関係が、例えば先生と生徒、親と子、そんな人間関係をつむぎあっていく基礎なのではないかなあということは言えると思います。

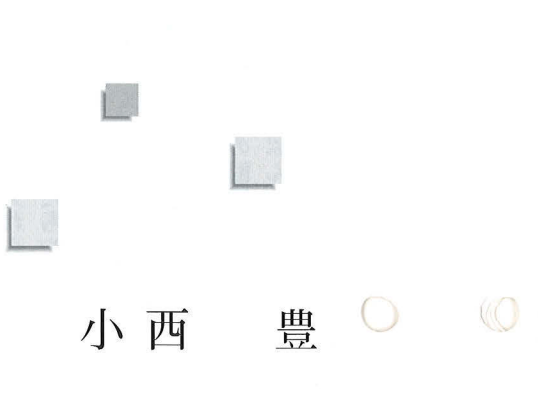
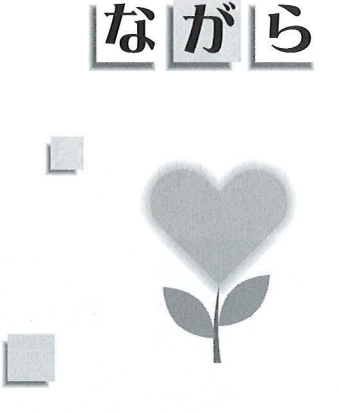
安心して自分を出せるように なったらシメタもの…… 人間関係の基礎づくり

私は不登校の子どもたちとつきあっていて、一番勉強になってきていることは、自分を裸にしてみせることとは、

はなかったかなと思っっています。

「私は教師だから……」という面も正直言っているもあつたと思います。が、それだけでは今の子どもたちは自分の本音をさらけ出すことはありません。今の子どもたちは感想文を書かせても、自分をうまく繕ったり演じたりすることもできるんです。いい子を演じてこういう風にしたら先生に気に入ってもらえそうだなと思うと、そういう言葉を選んで書いたり言ったりすることもできます。

でも、何度かぶつかりあつて、こちららも殻を破って教師の方から自分を出していくと、安心して自分を出していいんだなあと思うようになってきます。そこまでがとても時間がかかるんですね。一年も二年も……。そういう体験を繰り返していくと、授業のときや、いろいろなことをやったときの感想文にも安心して自分を出すようになってきます。それが



小西 豊

も連れ合いに頭が上がりません。いつも私はおいしいところだけもらっているだけだ。これじゃあいけないなあ……と。

でも、「気づき」は年々多くなってきました。今年の五月ごろ、下の子（息子）が風呂で泣いたことがあつたとき、私はハッとしました。ふだんは何の役にも立っていないオヤジに、息子が、風呂でのふとした話から、サッカーでいじめられたことをつぶやいたのです。そのときつくづく思いました。ふだん私はほとんど父親として失格なんだろうけど、いざというときに、「気づく」能力があるよね。そういう気づきで私は救われているのではないかと。

不登校の中学生とずっとつきあっていたなかつたら、多分息子のつらさが聴けていなかったんじゃないかと。そういう気づいたときが第一歩なんだと思います。失敗ばかりなんです。お互いに子育ての失敗をおおびらに言える関係、それは、弱音を吐ける関係でもあるんですよ。親子、先生と生徒、おじいさんやおばあさんと孫、嫁と姑……そんな人間関係づくりを日ごろから意識していただいたいんじゃないかと、最近つくづく思っています。

（二）にしゆたか／中学校教員



ブライトン・マス・クワイヤー高知

のご紹介

「天に向かって歌う歌、それが『ゴスペル』」「言葉でも音程でもリズムでもない。ゴスペルはゴスペルという歌ではなく、歌う『その人自身』」

そんなジャズシンガー綾戸智絵の思いを受け、心のままに感情のままに集まったメンバーは東京・大阪・名古屋・高知を合わせると総勢800名。それぞれ「アノインティッド・マス・クワイヤー」、「ブライトン・マス・クワイヤー」の名称で活動しています。私たちは、職業も年齢もさまざまで、宗教に関係なく、愛する人や支えてもらっている周りの人、頑張っている友人などに感謝の気持ちやメッセージをこめ、楽譜にとられない心のハーモニーでゴスペルを歌っています。

そんな思いで解放された魂に、それぞれの想いが幾重にも重なり、無限に広がるサウンドを造りあげ、いろんな場面で「忘れていたものを思い出させるサウンド」「感動の伝道師」などの評価をいただきました。

姉妹グループであるアノインティッド・マス・クワイヤーとブライトン・マス・クワイヤーは、これまで、綾戸智絵の全国コンサートやレコーディングに参加してきました。また、DA PUMPやスターダストレビュー、岡本真夜の全国ツアー、各地の学校コンサートや成人式などで多岐にわたり活動中です。

ブライトン・マス・クワイヤー高知は、昨年11月の第2回全国障害者スポーツ大会「よさこいピック高知」の時に募集した「よさこいゴスペルクワイヤー」のメンバーが「もっと歌いたい!」「もっとつながっていたい!」ということで今年2月に発足しました。月2回、高知市で練習しています。音楽経験もなく、楽譜も読めないメンバーがほとんどですが、リーダーの河原が「練習にきて、元気になって帰ってほしい」と言っているとおり、皆歌うことが好きで、それが楽しくて集まってきました。

ブライトン高知の活動としては、8月2日、南国市の「まほろば祭り」に出演し、300発の花火とともに祭りのフィナーレを飾りました。また、9月18日に高知県民文化ホール・オレンジで開催された綾戸智絵のコンサートにも初出演。たくさんの方から「感動した」という言葉をいただきました。11月2日には高知市の中央公園で開催される高知県地域福祉フェスティバル「くるしおくんタウン」に出演することが決まっています。

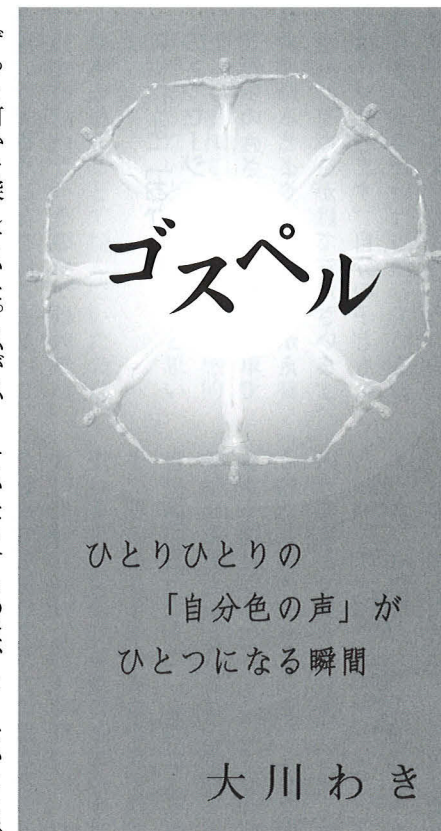
現在メンバーは100名。高知での活動が主ですが、もっとメンバーを増やし、将来的には広く四国で活動したいと思っています。

ブライトン・マス・クワイヤー高知 マネージャー 田浦朋子 (たうらともこ)

連絡先: FAX 072-757-3747

メールアドレス brighten@iris.eonet.ne.jp

アノインティッドHpアドレス http://www.anointed.jp/



ゴスペル

ひとりひとりの
「自分色の声」が
ひとつになる瞬間

大川わき

ずっと何かを探していた。私が私であることを。無理しないで居られる場所を。どんな私でも(そう不完全で未完成の私でも)受け入れてくれる仲間を、探していた。

「ブライトン・マス・クワイヤー」

なんだか意味がわからないけど、まっ、いいか。まわりの人々を見わたすと、それほど変わった人もいないし、危険も感じない。普通に見える。こんな始まりだった。

年輪を重ねるたびに、「……でなければいけない」といういろんな枠にしばられて、はみ出したり、違っ

ていたりするのは、よくないこと恥ずかしいことだと、知らず知らずのうちになんか生きていくのが嫌で、歌い始める前に、周囲の仲間とハグして「音はずしませんがよろしく」とお互いあいさつする。合わない音も大きく声を出しながら、「こうかな?」とさがしながら、さぐりあ

どちらかといえば、音の迷子になっていた。糸が切れた風のように気持ちよく空に舞い上がったりしていることが多い。今まで飛んだこともない空に、高さに、景色に……、そして新しい飛び方を覚え始めて、や

忙しい毎日の中で無力な自分を思

棄当が作れなかったり、食器も洗わず寝てしまったりするダメな母親。子どもにエラそうなこと言っても、またヒステリックに怒っても、歌っている時、私の行き場のない感情が感謝に変わる。

「ブライトン・マス・クワイヤー」

私ができる今この時間が、明日からも頑張るぞというエネルギーになっ

に歌っても、あの味は味わうことが

できない。前の人も後ろの人も横の人も、そしてちょっと離れたあの人も一人として同じ声の人ははず、自分色の声を持っていて、生活スタイルや年齢も違う中で、一つの曲を歌い合う。息を合わせて、心を合わせて、同じ方向を見つめて……これって最高。おもしろいというか、うれしいというか、おいしいというべきか。とても味わい深いのである。

最初、「ブライトン・マス・クワイヤー」の「クワイヤー」で、私たち合唱隊のことだと分かった。みんなと一緒に歌っているこの時間が、とても貴重で、一秒一秒一体感を感じる。みんなとつながっていることがうれしい。この感覚が、ゴスペルを離れても、日常の生活の中でよみがえってきて役立つことがよくある。

生活の仲間・家族・会社・地域、大きくいえば日本・地球・宇宙と広がっていて、地球の裏のまだ見ぬ仲間に対しても、同じ一分一秒とともに歌っているように……地球上に共存する全ての生命と一緒に在ることに感謝できる自分が育っているように思えるのだ。

「ブライトン・マス・クワイヤー」高知 メンバー

ひとくちに「フランスコミック」と言っても、日本では、アメリカのコミック、いわゆる「アメコミ」のように明確なイメージを描けない人がほとんどだろう。それほどまでに、日本でフランスのまんがを見る機会

フランスコミック バンド・デシネの魅力

奥田 奈々美

は少ない。「タンタン」などの有名作品を除けば、ごく少数の研究者や出版社に取り上げられるにすぎない。しかし実際には、フランスコミックは多様で高度な発展を遂げ、「第九の芸術」と呼ばれるまでに成長して

いるのである。

フランスコミックは、「バンド・デシネ(BD)」と呼ばれているが、「デッサンの描かれた帯」というような意味である。その名のとおり、画一的なコマの並びで構成された作品が多く、多彩なコマ割りで流れるようにストーリーが展開する日本のコミックとはかなり違った印象を受ける。

また、作家の作品発表の場は、雑誌よりもアルバムと呼ばれる単行本での出版が主である。アルバムは、ほとんどがA4サイズ、ハードカバー、四十四〜四十八ページと、その体裁はほぼ定まっている。なおかつ、全ページフルカラーで制作されることが多く、一人の作家が出版するアルバムは、一〜二年に一冊のペースであるというのもうなずける。

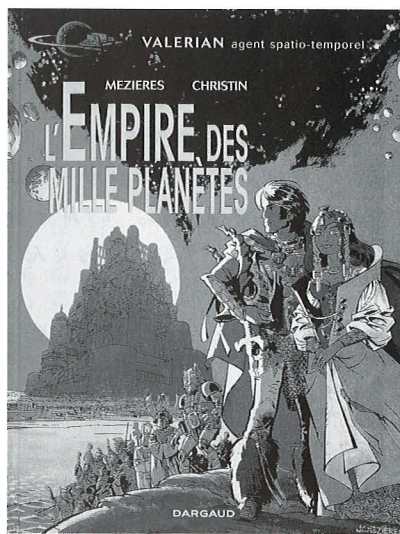
言語は分らずとも、一コマコマがイラスト、絵画として見ても遜色ない作品さえ存在する。それが、「第九の芸術」と呼ばれる由縁かもしれない。事実、BD界の巨匠・メビウスは、その洗練された明快な線と奥行きのある画面構成で、世界中のクリエーターに多大な影響を与え続けている。

一方で、あまりに定型化された出版形態がさらなる発展を妨げたとい

う見方もあり、近年は判形をA4にこだわらず、ソフトカバー、モノクロ出版する動きも見られる。モノクロであっても、白と黒の明瞭な陰影で描かれる作品はやはり日本のそれとは違い、オールカラーのまんが文化を形成してきたフランスならではの発展を遂げている。

共同制作が数多く見られるのも、BDの大きな特徴であるといえる。日本でも作画者と原作者といった分野形態は見られるが、BDは、さらに彩色の担当者や、書き文字の担当者、がいる場合もある。また、あるときは絵を描き、またあるときはシナリオにまわり、といったような変幻自在なコンビネーションの組み合わせも見られ、創作スタイルにさまざまなヴァリエーションを生み出している。シナリオに合う作画者を選ぶ、また作画者もシナリオによって作風を変化させるといった試みがなされるなど、BDは、多様な可能性を持っている。

十一月三十日(日)まで横山隆一記念まんが館企画展示室で開催して



メジエール「時空捜査官ヴァレリアン—銀河の帝国」©Dargaud

いる「フランスコミック・アート展」では、これらの作品の原画を中心に、BDの魅力でできる限り紹介した展示である。二百点を超える原画の中には、彩色前のモノクロ原画や、作家自らが彩色を施した完成度の高い絵画のような作品もある。使用されている画材も、色鉛筆やオイルパステル、水彩とさまざまであり、作家の個性がぶつかりあっている。

洗練された筆致を直接見ることができ、数少ない機会であるといえる。

また、閲覧コーナー「BDカフェ」では実際にアルバムを手にとり読むことができる。純粋に作品として楽しむと同時に、日本とは一味違ったフランスの「まんが文化」を感じてもらいたい。

（おくだななみ／横山隆一記念まんが館学芸員）

高知市文化プラザ かるぽーと 8月〜10月の事業のご報告

◆ニブノゴ！ 高知公演

『トーマン団地』として地元高知で爆発的な人気を博し、上京。その後吉本興業との専属契約、ルミネ吉本でのレギュラー出演、「爆笑オンエアバトル」等多数のテレビ番組出演と、お笑いの世界を一気に駆け上がるニブノゴ！の凱旋ライブを八月二十六日、大ホールで開催しました。

地元ファンに温かく迎えられた三人は土佐弁を交えたコントなどを披露。会場は大いに盛り上がりました。

◆伊藤キム・ダンスワークショップと「階段主義」

八月二十七日〜二十九日には、伊藤キムによるダンスワークショップを昨年引き続き実施しました。

十一名の参加者は、伊藤キムと東京から参加したダンサー十三名とともに、八月三十日・三十一日、夕暮れのガレリア大階段を舞台に「階段主義」と題した作品を発表。かるぽ

◆Future Kiss—サ ブカルチャーエキシビジョン

ーとという建築物のシンボルともいえる大階段と、「人間のからだ」を表現するダンスの対比が、のべ五百人の観客の目を引きつけました。

同じく八月三十日・三十一日、小ホールでは、美術・映像・音楽・ダンスなどさまざまなジャンルを融合させた観客参加型展覧会「Future Kiss」を開催しました。

この催しは、美術作品の展示、ダンスライブ、映像作品と音楽演奏のコラボレーションをはじめ、似顔絵描き、オープンカフェ、グッズ販売など、観客が自由に楽しめる空間づくりをめざした新たな試みでした。

◆詩人たちの絵展

九月二日〜二十六日、市民ギャラリー第三室・第五室で、詩人たちの絵展—ヘルマン・ヘッセから宮澤賢治まで—を「詩人たちの絵展」実行委員会との共催で開催しました。

この展覧会は、日本文学誕生期の詩人たちの絵画作品や関連資料を集め、改めて日本の美術と文学の密接な関係に焦点を当てたもの。若くして没した村山槐多や立原道造らの貴重な作品をはじめ、高村光太郎や中川一政らの作品百点余りが展示され、観覧に訪れた人々は詩と絵の織りなす独自の世界を楽しんでいました。

また、関連企画として、小ホールを会場に、九月十五日には作家で信濃デッサン館館主の窪島誠一郎さんの講演会「詩人が絵を描くとき」、九月二十一日にはバイオリニストの天満敦子さんのコンサート「望郷のバラード」を開催し、熱心な文学ファン・音楽ファンが詰めかけました。

◆平成15年度文化庁「本物の舞台芸術体験事業」モダンダンス公演

子どもたちに本物の舞台芸術にふれる機会を提供することで、芸術を愛する心を育て、豊かな情操を養うことをめざす「本物の舞台芸術体験事業」として、十月三日、大ホールでモダンダンス公演を行いました。

小学生・高校生を中心に約七百名を招待し、「クラッシュ タンゴ」「ありす」「クワドロ・フラメンコ」の三作品を上演。作品の間には、

舞台転換の様子も見学しました。子どもたちは、三作品それぞれの雰囲気味わい、生の舞台の迫力に感動するとともに、ふだん見られない舞台裏を興味深く見ていました。

◆ミュージカル「フレディ」少年フレディの物語

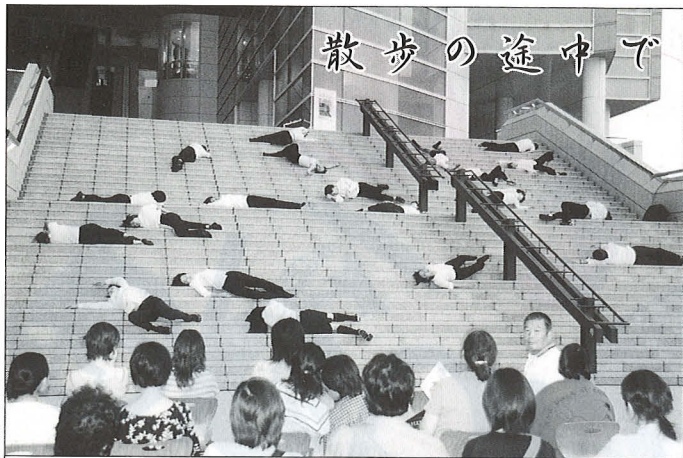
ベストセラーとなった絵本『葉っぱのフレディ』を原作としたミュージカル「フレディ」が、九月五日、大ホールで開催されました。

島田歌穂さん演ずる少年フレディが、葉っぱの一生を自分の人生に重ねながら「いのちと死」に向かい合うストーリーは、悲しいけれども心温まる感動作でした。

◆ウィーン・ヴィルトゥオーゾ高知公演

十月十二日には、大ホールで、ウィーン・ヴィルトゥオーゾ高知公演を開催しました。

ウィーン・フィルの首席奏者を中心に結成されたウィーン・ヴィルトゥオーゾは、古典派から現代音楽までの小編成の室内楽だけでなく、協奏曲や交響曲といったフル・オーケストラの大曲を十一名とは思えない重厚な響きで聴かせてくれました。



散歩の途中で

8月末、かるぽーと正面の大階段で披露されたダンス「階段主義」。もしかして、散歩の途中で見かけてくださった方もいらっしゃるだろうか。音楽や効果音が鳴り響くなか、ダンサーたちが階段を転がり落ちたり、奇声を発しながら駆け回ったりする光景を見て、呆然と立ちすくむ歩行者。信号待ちの車内で、あつげにとらわれている運転者。いっせいにこちらを振り向いている電車の乗客。いったい何事？ と不快に思われたらどうか。変なもの見た、と面白がってくださったらどうか。私は、巨大で無機質な建築物のうえで、ちっぽけな人間たちが、なんと奇妙でいきいきしていることが、と胸が熱くなっていた（ちょっと大げさ？）。

風伯

「梟首の島」(坂東真砂子) 異聞

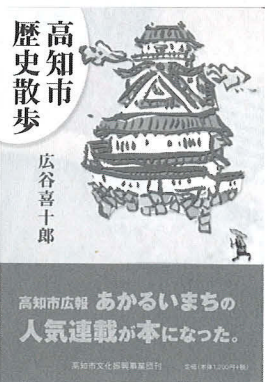
に作品を発表するということは、作者にしたら大きな勝負の世界だろう。郷土出身作家、坂東真砂子が九月から、高知新聞へ「梟首の島」を載せ始めたが、彼女にとっては確か初めての新聞小説だと思ふ。直木賞作家として、押しも押されぬ力量を見せておられる方だが、

その意気込みには並々ならぬものがあると思う。高知もまた大きなスペースを割いて前宣伝を重ねた。土佐の作家が土佐の自由民権運動を見据えた小説を書くのだ。満を持して……という形容がふさわしく、読者もまた期待して連載開始の日を待っていたのである。ところで、八月のこと、縁あって軽井沢を旅した。別天地の別荘風景には改めて驚いたが、それ以上に、地元新聞「信濃毎日」(四十八万部)を手にしてアツと思った。「梟首の島」が堂々？と掲載されていたのだ。地方新聞の場合は何紙かが掛け持ちで、というのは承知していたが、郷土作家による郷土民権の話である。他所で既に発表されており高知掲載が後発であったとは……。大きなショックであった。田舎者は純情過ぎるようですね。(3)

高知市文化振興事業団の本

高知市 歴史散歩

広谷喜十郎 著



郷土史を長く研究している著者が、高知市広報「あかるいまち」に20年を超えて連載している人気コーナー「高知市歴史散歩」が、1冊の本になりました。1話から107話までを収録しています。

A5判・並製本・224頁
本体価格 1,200円

今号の表紙

「Skate girl」 大平裕之
僕らが小さかったころ一世を風靡し、華麗に滑ることを夢見たローラースケート。最近ではあまり見かけることもなくなった。そして夢さえ見えにくいこのごろ。でも、奇麗なお姉さんが履くと、滑ってなくても可憐で素敵な夢を見ることができると、ちょっとノスタルジックでフェティッシュな新しい発見。(ELEPHANT DESIGN 4 おおひらひろゆき)

高知を撮る

第19回写真コンテスト入賞作品

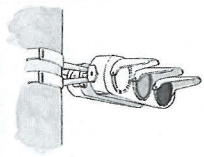


過ぎし日の風景、消えゆく段々畠 (平成5年 大月町)

今西 誉

過剰サービス

風俗歳時記



スーパーやコンビニ、それに「平成大不況」が加わり、商店街を取り巻く環境も厳しさを増しているようである。そのせいか、街筋のサービスにも、さまたげまな工夫が見られるようになってきた。

帯屋町のアーケード街も、すっかり明るくなり、道の中央に置かれたポットの花などを見ながら、爽やかな気分がぶらぶらつくる。でも、一方、その爽やかな気分を突然不快にする「時代遅れの過剰サービス」も残っている。「番号が青になりました。どうぞ、お渡り下さい」とのご教示、毎度のこと、慣れてはきたが、どう考えても、余計なおせっかいである。

地方都市としては、関東あたりよりずっと早く、電気や市街電車を導入した高知である。青で進むぐらいのことは、じんまもばんばも、よく知っている。でも、高知をあまり知らない観光客の中には、「そうか、高知にもやっとならぬ」と思われる。信号機ができたので、歩行者に指導が必要なんだ」と、早合点する慌て者がいないとも限らない。

それより問題なのは、商店街の騒音に対する無神経さである。ヨーロッパの鉄道が、音も無く入線してきて、発車のベルもなく、静かにホームを離れてゆくスマートさは心に残る。この静かさこそ看板(特に野立ち看板)の少なさが、ヨーロッパの旅の印象を爽やかにしている。最近、我が国でも、各地の鉄道駅で、ホームでのアナウンスや発車ベルを無くしたり、ベルを音楽に変える試みなどが進行中で、なかなか好評のようである。

やたらと看板を立てたり、音楽を流したりして、客寄せをする時代は去りつつある。看板による目からの暴力や、騒音による耳からの暴力に敏感な消費者が増えてきていることに、「街おこし」の指導者たちは、もっと気配りする必要があるように思われる。(路)



Mélieux-Christin ©Dargaud
De Créty & Les Humanoïdes Associés
Dawid & G. Association
Dupuy & Berthelin & Les Humanoïdes Associés
Duroy & Sier ©Dargaud
Joseph Star-Tromham ©Dargaud
Lewia Tromham ©Dargaud

知られざるフランスコミック バンド・デシネの世界

フランスコミック・アート展

2003.10/18(土) - 11/30(日) 横山隆一記念 まんが館 YOKOYAMA MEMORIAL MANGA MUSEUM

開館時間 9:00-19:00 休館日 月曜日(ただし11月3日・24日は開館)
入館料 企画展入場券: 一般300(240)円/中学生150(120)円/小学生100(80)円
常設展共通券: 一般600(480)円/中学生300(240)円/小学生150(120)円
※()は20名以上の団体料金 小学生未満の児童は無料、65歳以上の方は半額
身体障害者手帳(1,2級)、療育手帳及び精神障害者保健福祉手帳をお持ちの方とその介護者1名は半額。

〒780-8529 高知市九反田2-1 高知市文化プラザがらぼーと内 TEL.088-883-5029
主催★(財)高知市文化振興事業団・横山隆一記念まんが館 共催★高知新聞社・RKC高知放送
後援★フランス大使館文化部・高知日仏協会・エフエム高知・NHK高知放送局
KSSさんさんテレビ・KUTVテレビ高知・高知ケーブルテレビ・高知シティFM放送
協力★日本マンガ学会・東京日仏学院 L'INSTITUT 企画協力★I.D.F.Inc